

講話の感想

1 校長は子どもと直接関わるべきではない

先日報道された小学校校長の体罰事件を受けて、県教委は小中学校の校長を前に次のようなことを話された。

『校長は直接児童や生徒に関わるのではなく、部下職員が子どもとどう関わっているかをチェックし職員を指導することが仕事である。校門に立ってスカートが短いとか髪の毛が赤いとかいうことを校長が直接指導すべきではない。』

正直言って、えっそうだったのか。というのが率直な感想である。

私自身は校長としては中学校経験しかないが、いわば県教委がやってはいけないということをして今日まで率先してやってきた一人である。毎朝生徒玄関に立ち、生徒と挨拶を交わすと同時に服装についての声かけも積極的に行ってきた。言ってみれば、正にダメだと言うところの『…スカートが短い髪の毛の色がどうだの…』を先頭切って言ってきた。

もちろん、そのことが校長の本務だとはさすがに私も思っていない。しかし、教員の仕事は本務に専念すればそれでいいというものではない。本務を下支えする見えない仕事が山ほどあるのである。責任ある立場になればなるほどである。

しかし、今回の講話の中ではそのようなことは校長がやってはいけないのだということのようである。

講話が県教委の指示であるなら、校長はすぐに児童生徒と関わることを止めなければならない。でも本当にそれでいいのだろうか。県立学校ならまだしも、特に小中学校の校長の立ち位置はそれでいいのだろうか。校長自身は校門に立たないで校舎の陰にでも隠れてどの職員が登校指導しているかを観察するのだろうか。

確かに、生徒と関わらなければ校長が体罰を下すこともないだろう。しかし、校長の体罰と校長の児童生徒との関りとは本来同次元で考えるべき事象ではないはずなのだが…。自分の中では納得がいかない。

できれば地教委も同じ見解であるのかどうか聞きたいものである。

2 過疎地区への誘致企業の社員は単身でしか来ない…その理由は

さらに県教委の講演者は次のように続けた。

『トヨタ自動車の子会社を過疎地区に誘致すればいわゆる過疎に歯止めがかかるだろうという構想がある。しかし、現実はそのようにならない。なぜなら、過疎地区へ派遣される社員は家族を伴っては来ないからである。』

この講話を聞いたのは今回が2度目である。

『なぜ単身で来るのかといえば、過疎地区の教育環境にある。子どもや奥さんを連れてきて、わが子を名古屋大学の工学部に入れてさらにはトヨタに入社できるような教育環境がこの地区にありますか。当然、子どもや妻は教育環境の整った都会に置いてきますヨ。』というのが、過疎地区に対する見識のようである。

地区の全小中学校の校長を集めてこのように言い切るのである。地区の校長としては指摘を甘んじて受けなければならない部分も確かにあると思う。しかし、講話を受けた校長たちは校長である以前にこの地区に家族と暮らす住民の一人なのである。しかも大多数の校長は好むと好まざるとにかかわらずわが子をこの地区で育て、少なくとも高等教育まではこの地区で受けさせているのである。

講話の言葉は『皆さんの子どもは名古屋大学の工学部にはどうてい手が届かないでしょ』と言っているのと同じなのである。現実を肯定するかしないかの問題ではなく私は怒りに近いものを感じた。私はこの講話を3度聞くには耐えない。

さて、単身で来るだろうと言う予測は私も当たっているだろうと思う。しかし、その理由が『教育環境』であると言い切ることに私は反感を覚えるのである。

確かに教育環境もあるかも知れない。しかし、自分に置き換えてみれば分かると思うが、単身でくるかどうかの選択要素はそんな単純なものではない。たとえば商業施設や趣味、娯楽を満たしてくれる遊興施設、あるいは健康を保障する救急医療や病院の施設や人的環境、福祉や老後の保障等々いろいろあるはずである。その優先順位のトップが『教育環境』であるかどうかはその家庭や家族によるとしか言いようがない。

講話は我々に対して、『トヨタの社員が家族を連れてこの地区へ来るような魅力ある教育を行ってほしい』という熱い激励メッセージを送ったにちがいないと思うのだが、それは我々の努力で満たされるものであるかどうかはなはだ疑問である。

それでも、我々はこの地区で最大限の努力をしているし、今後もその努力を続けるつもりである。